

江戸時代以前に見られた蜃気楼の記述

蜃気楼について過去の文献にあたる場合、見た記録あるいは見えるという情報の記録であるのか、蜃気楼という言葉の記述であるのかを分けて考える必要がある。今回は蜃気楼という言葉の記述に注目して文献調査を行った。

蜃気楼の、国内の最古の記録としては、魚津の蜃気楼について書かれた「寛文東行記(1669年)」*1や、「北越軍談(1697年)」*2などがある。

一方、蜃気楼の古い記述としては、中国の「史記」*3(紀元前91年頃*4)に「蜃楼」、インドの「大智度論」に空中の城、「乾闥婆城」という記述がある。

国内の蜃気楼の記録や記述は江戸時代以降に多く見られる*5。一方、蜃気楼の一種である「逃げ水」については、平安時代に、空海の弟子である真済(800年-860年*6)がまとめた「性霊集(成立年不明)」で記述されるほか、源俊頼の和歌(1192年頃)*7で記録される。本編では、「性霊集」には逃げ水のほか、蜃気楼の漢詩が2つ記述されていることや、室町時代の万里集九(1428年-1507年*8)の漢詩集「梅花無尽蔵(成立年不明)」に蜃気楼が記述されていることを紹介する。

1. 空海「性霊集」の「蜃楼」、「乾闥婆城」など

空海の漢詩文集「性霊集」の詠十喻詩にある「詠陽燄喻(陽燄の喩を詠ず)」に、「遠而似有近无物(遠うしては有に似たれども近うしては物無し)*6があり、逃げ水の最古の記述とされてきた。

このことは江戸時代の「燕居雑話(序に天保8(1837)年とある*10、日尾荊山)」の「逃水の項目で、取り上げられる。大正初期の「富山湾乃蜃気楼(1919年、富山県伏木測候所)」では、「燕居雑話」にある「性霊集」の逃げ水を引用。昭和に入り、「大気中の光象(1933年、藤原咲平)」では、「性霊集」を引くほか、蜃気楼という言葉が中国やインドから仏教とともに伝来したのではと指摘。また、蜃気楼についての記録・記述を年表にした「日本及び近傍における蜃気楼(1),(2)(1956年、澤泉重夫)」や、蜃気楼情報を網羅した「蜃気楼有情(1981年、北日本新聞社)」においても「性霊集」の逃げ水が蜃気楼的

魚津埋没林博物館 佐藤真樹

現象の国内最古の記述としている。近年では、「蜃気楼-蜃気楼台を象づくる-(2004年、藤原裕文)*11」、「海の幻 富山湾乃蜃気楼(2009、澤崎寛)」、「喚起泉達録の中の蜃気楼(2014、麻柄一志)」でも同様に引用される。一方、「性霊集」の「蜃楼」などの記述には触れられてこなかった。

詠十喻詩には、「乾闥婆城」(=蜃気楼)を含む題の漢詩があった*12。

「詠乾闥婆城喩」

海中嚴麗見城櫓 走馬行人南北東
愚者乍觀爲有實 智人能識假而空
天堂佛閣人間殿 似有還无與此同
可咲嬰兒莫愛取 能觀早住眞如宮

【書き下し】*6

「乾闥婆城の喩を詠ず」
海中に嚴麗にして城櫓を見る
走馬行人南北東
愚者は乍ちに觀て實有とす
智人は能く假にして空なりと識る
天堂と佛閣と人間の殿と
有に以て還つて無なること此と同じ
咲ふべし嬰兒を愛し取ること莫れ
能く觀ずれば早く眞如の宮に住す

「海中に蜃気楼が見え、人や馬が行きかうように見える。愚かな人は本当にあると思ひこむが、知性ある人は実際には無いと気がつく」と説明する。

同様に、「性霊集」のなかでは、中階官人の「大夫」*13に宛てた願文にも蜃気楼について書かれていた。

「荒城大夫奉造幡上佛像願文 一首」

瓊粮吐故。城邈射而盤垣。
馭鵠策風。都大羅而跋扈。
雖云希夷玄妙忽恍冥然。
々猶。蜃樓構宮。夢幻築室。
豈若。性蓮大我。遍大虛而无終。…

【書き下し】*6

「荒木大夫、幡の上の佛像を造り奉る願文 一首」
瓊粮、故きを吐いて邈射に城いて盤垣す。

ぎよこく、むちう たいら みやこ はっこ
 馭鶴、風に策つて大羅を都として跋扈す。
 きい けんべう こつくわうめいぜん なりいと云ふと さいど
 希夷玄妙にして忽悦冥然なりと云ふと雖も、
 なおしんろうきゆう かま むげんしつ きつ
 然も猶蜃樓宮を構へ、夢幻室を築く。
 あにし しやうれん だいがたいきよ へん をは
 豈若かむや、性蓮の大我大虚に遍して終り無く、…
 「蜃氣楼が御殿を作り、まぼろしのような架空
 の部屋をつくるとし、どう理解したらいいだろうか」
 となげかけている*14。なお、金沢市立玉川図書館
 近世資料館所蔵の「遍照發揮性靈集(1645年作成)」
 *15の同じ個所には、「漢書」の”海傍有蜃氣爲樓
 臺”が注記されている。

2. 万里集九「梅花無尽蔵」の”蜃楼”など

万里集九は、室町時代の僧侶・歌人である。宮崎から滑川、猪谷、そして飛騨へと旅した記録*16を始め多くの漢詩を時系列で残した「梅花無尽蔵」を著した。越中通過の個所*16では蜃氣楼の記述はなかったが、黒部四十八処や、立山の雪*17のことが記録される。

万里は、「梅花無尽蔵 5巻 便面 1柄 蜃楼」で以下の漢詩を読んでいる*18。

化城雖五百 不及蜃多求
 爲報未央燕 莫巢海市楼
 【書き下し】*19

けじょう ごひやく
 化城 五百ありといへども
 しん おほ もと およ
 蜃 多くを求むるに及ばず
 ほう な びあう つぼめ
 報を爲す 未央の燕
 かいし ろう す
 海市の樓に 巢くふことなかれ

これは、便面(うちわや扇子)に描かれた蜃楼を見て詠んだ句とされる。この漢詩の中では、“蜃楼”、“化城”、“海市”と、それぞれ蜃氣楼を指す言葉が記述される。さらに、“蜃が燕を食べて蜃氣楼を作る”という蜃氣楼の話として有名である*20。

なお、最後の句の”海市”*21は”海中”となっている文献が2つあった*22,23。「梅花無尽蔵」の伝本研究をされている中尾健一郎氏から、平仄によると”市”が妥当であること、伝本として信頼できる蓬佐文庫の江戸時代中期の写しも”海市”となっていることから、“海市”でよいのではと指摘いただいた。

万里は、宋代随一の文豪とされた蘇東坡の詩

集を5年間にわたり講義し、詩の注釈を「天下白(1482年草稿)*8」としてまとめている*24。蘇東坡は、自身が見た蜃氣楼の漢詩”登州海市”を作った*25。この漢詩は、万里も知っていたと考えられるほか、昭和の小説「海市(1968年、福永武彦)」の冒頭に引用されるなど、時代を経ても伝わってきている。

なお、この蜃楼の漢詩は、「梅花無尽蔵」の中でも、漢詩を作った場所や時代の順序が整っていない部分に記述される。

3. まとめ

江戸時代より前の国内の6つの文献に、“蜃楼”や”海市”、“逃げ水”等の記述があった(別表)。なお、「史記」などが日本に伝来した歴史を踏まえると、さらに古い文献中にも蜃氣楼の記述があると考えられる。

別表 江戸時代以前に見られた蜃氣楼を記述した文献

成立年	筆者「タイトル」	用いられた語
不明 (平安時代)	空海「遍照發揮性靈集」	蜃楼、乾闥婆城、陽炎(内容は逃げ水)
不明(819年-822年)*27,28,29	最澄「上願戒論表」*26,27、「守護国界章」*28、「法華秀句」*29	化城
1277-1279年 (刊行、8世紀成立)	沙門一行「大毘盧遮那成佛經疏」*30	乾闥婆城
不明 (室町時代)	万里集九「梅花無尽蔵」	蜃楼、化城、海市

引用文献

- *1 石須秀樹, 2020, 江戸時代の魚津の蜃氣楼うもれ木51 <https://www.city.uozu.toyama.jp/nekkolnd/news/umoregi-pdf/051.pdf>
- *2 木下正博, 2013, 上杉家の軍記「北越軍談」と蜃氣楼, 日本蜃氣楼協議会 H25 年度研究発表会講演要旨集 [http://japan-mirage.org/wp-content/uploads/kenkyu/2013\(H25\)/2013-01.pdf](http://japan-mirage.org/wp-content/uploads/kenkyu/2013(H25)/2013-01.pdf)
- *3 司馬遷, 紀元前 90 年頃, 史記 天官書”海旁蜃氣象樓台” <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/958959/89>
- *4 李長之 和田武司訳, 1988, 司馬遷
- *5 麻柄一志, 2014, 喚起泉達録の世界, 喚起泉達録の中の蜃氣楼
- *6 渡邊照宏・宮坂有勝, 1965, 日本古典文学大系 性靈集
- *7 源俊頼 散木奇歌集 第9巻上”東路に有りといふなるにげ水のにげのがれても世を過すかな” <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1879754/351>
- *8 中川徳之助, 1997, 万里集九
- *9 弘法大師全集, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/819284/280>
- *10 石上阿希, 2013, 日本春園における外来思想の受容と展開
- *11 藤原裕文, 2004, 蜃氣楼-蜃氣楼台を象づくる-, <https://annex.jsap.or.jp/photronics/kogaku/public/33-01-salon2.pdf>
- *12 弘法大師全集, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/819284/281>
- *13 弘法大師空海全集編輯委員会, 1984, 弘法大師空海全集 第六巻
- *14 宮坂有勝, 2001, 傍訳 弘法大師空海 性靈集(下)
- *15 金沢市立玉川図書館近世史料館 所蔵文書データベース, 遍照發揮性靈集, http://jmapps.ne.jp/amhr/det.html?data_id=17211
- *16 市木武雄, 1993, 梅花無尽蔵注釈 2, p152-154
- *17 広瀬誠, 1992, 立山のいぶき, p137
- *18 市木武雄, 1993, 梅花無尽蔵注釈 3, p394-395
- *19 佐藤邦子(元国語教師)による
- *20 李時珍, 1590(出版年), 本草綱目, 第 24 冊(第 43 巻), <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1287105/9>
- *21 東京大学史料編纂所, 梅花無尽蔵(七巻 4 冊本), <https://cloing.hi.u-tokyo.ac.jp/viewer/view/idata/200/2034/48/3/0631>
- *22 万里集九, 梅花無尽蔵, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2550869/91>
- *23 東京大学史料編纂所, 梅花無尽蔵(平戸藩蔵書), <https://cloing.hi.u-tokyo.ac.jp/viewer/view/idata/000/0134/3/6/00000033>
- *24 市木武雄, 1993, 梅花無尽蔵注釈 4, p39
- *25 蘇東坡詩醇, 卷之 5, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/895239/12>
- *26 安藤俊雄・園田香融, 1974, 最澄, p157-161
- *27 大竹普, 2021, 現代語訳 最澄全集 第一巻, p497-500
- *28 大竹普, 2021, 現代語訳 最澄全集 第二巻, p304-308
- *29 大竹普, 2021, 現代語訳 最澄全集 第四巻, p172-181
- *30 大毘盧遮那成佛經疏, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2569871/11>